

9月になりました。みなさんはどのような夏を過ごしましたか？カスタネット通信9月号のテーマは『音』です。

音楽ワークショップ



8月5日(土)に開催された「こども音楽ワークショップ」に参加しました。このワークショップは難聴のあるお子さんたちに、音楽を身近に感じて欲しい、音楽を楽しんで欲しいという目的で、難聴者音楽感受研究所の主催で行われました。私たちは研究所の所長の松本先生にお声がけいただき、ワークショップの紹介をするという形で協力させていただきました。

 会場は長津田駅から徒歩5分の場所にある『音楽館セレム』でした。素敵な一軒家のコンサートホールです。

ワークショップでは、はじめに東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の方々がヴァイオリンで「愛の挨拶」、ビオラで「川の流れのように」、チェロで「無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 プレリユード」を演奏してくださいました。ヴァイオリン、ビオラ、チェロと楽器が大きくなると音が低くなるということがよく分かりましたし、プロの演奏を間近で聞くことができ、感激でした。その後はアイネクライネナハトムジーク第1楽章の弦楽四重奏でした。先程 1つずつ聴いたヴァイオリン、ビオラ、チェロの重厚な音を楽しむことができました。また、ひとつひとつの楽器の音を教えてもらっていたので、音の違いに注目して聴くこともできました。



次にテノール歌手の方が様々な言語の響きを感じるために、日本語で「ふるさと」と「ドレミの歌」、イタリア語で「カタリカタリ」、ドイツ語で「鱒(ます)」を歌ってくださいました。「鱒」の伴奏では弦楽器をはじいて弾いており、ドイツ語の発音に合わせた弾き方なのかな、と思いました。そして、いよいよ聴衆が参加する、打楽器体験の時間です。「ド」と「ソ」の音のウッドブロックとトーンチャイムを使いました。「ド」のチームと「ソ」のチームに分かれ、合図に合わせて音を出します。音を出すタイミングの練習を少ししたあとはすぐに演奏です。曲は「ドレミの歌」です。弦楽器と歌に合わせて自分たちも演奏に参加するというのはとても良い経験でした。



休憩を挟み、今度は弦楽器体験です。楽器を持つ前に自分の指を弦に見立て、どの弦が何の音が説明を受けたあと、開放弦「ソ」「レ」の練習をしました。体験する楽器はヴァイオリンとチェロです。私はヴァイオリンを触らせてもらいました。ヴァイオリンを弾くのはほぼ初めてで、同時に2本の弦に触れてしまい、濁った音が出ていましたが、楽団の方に弓の角度を教えていただくとだいぶ良い音になったように感じました。合図にあわせて「ソ」「レ」ができるようになったら、次はアイネクライネナハトムジークの演奏です。私達の「ソ」「レ」に楽団の方々が合わせて演奏してくださいたり、とても素敵な合奏になりました。「ソ」「レ」だけなのですが、やり遂げた感がありました。



間近でプロの演奏を聞けること、自分で音を出し、みんなで音を合わせることはとても楽しく、良い経験でした。今回、宣伝期間が限られていたため、全ての方にはワークショップの開催をお知らせできませんでした。次回開催時は皆さんもぜひご参加ください！私もまた参加したいと思います。

真夏の暑い日。ヒマワリがきれいに咲いていました。



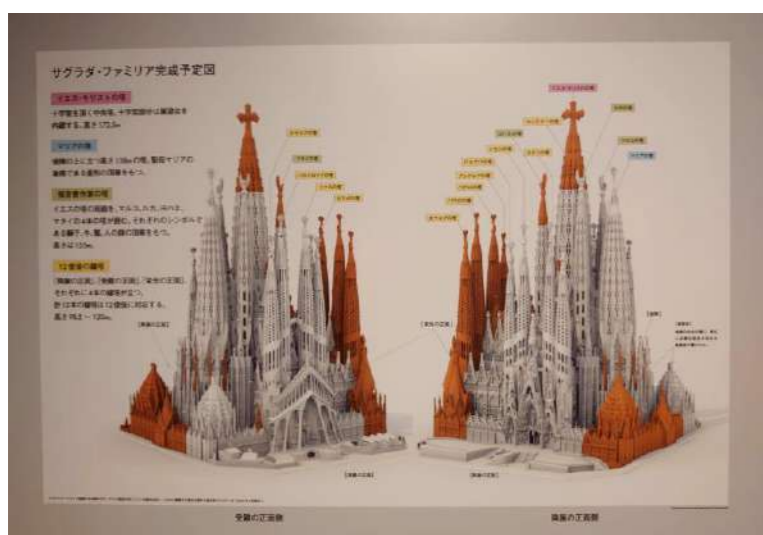
サグラダ・ファミリア

東京国立近代美術館の『ガウディとサグラダ・ファミリア展』に行きました。サグラダ・ファミリア聖堂と音、一見関連が無いと思うかもしれませんが、しかし、生誕の門の歌う天使像を制作した彫刻家・外尾悦郎さんの著書『ガウディの伝言』には「ガウディがもっとも情熱を傾けて実現を夢見ていた大きな構想の一つが、サグラダ・ファミリアを楽器にするということです。」と書かれています。

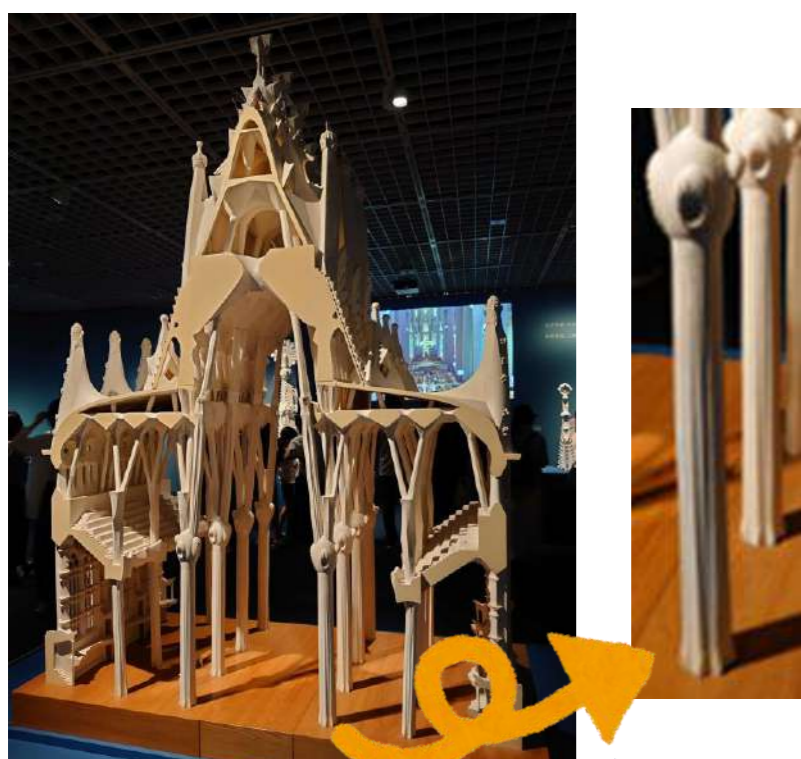


左の石膏像は先述した外尾さんが“ガウディの伝言”を受け取り制作した、歌う天使像です。スペイン市民戦争時に、ガウディが残した模型や図面などは破壊されてしまいました。展覧会では「ガウディ以降」と分類されていましたが、ガウディ死後の建築家や彫刻家はガウディが作った部分から、「ガウディならばどのように考え、どう作るか」という思いを受け取りサグラダ・ファミリアの建築を続けているそうです。

さてサグラダ・ファミリアを楽器にするという構想については、「聖堂内の鍵盤楽器と十二使徒の塔に設置された音源をつなぐ」ということだけ語り残されているそうです。サグラダ・ファミリアにはイエス・キリストの一生を表す生誕の門、受難の門、栄光の門があります。生誕の門はピアノ、受難の門はパイプオルガンになり、栄光の門は打楽器系の楽器になるのではないかと推測されています。門の周囲に建てられている塔は音道の役割を果たすのでしょうか。完成したらどのような音が奏でられるのか想像がつかないのですが、ぜひ聞いてみたいですね。



初版発行が2006年の『ガウディの伝言』には「サグラダ・ファミリアは2020年代の完成を目指すと公言。」と書かれていました。それから17年。途中コロナ禍に見舞われ、建設が中断したこともありましたが、コンピューター解析なども使われるようになり、建設スピードは格段に上がっているようです。しかし左の完成予想図を見ると未完の茶色い部分がまだまだ残っているように思います。



柱を拡大

左は聖堂の模型です。柱が上にいくと枝分かれしていて樹木のようになっています。また、柱の底面は六角形に近いゆるやかな星形ですが、上に行くほど円柱に近づいていきます。ガウディは木や花などの自然から着想を得て、建築に取り入れているそうです。今回は展覧会や外尾さんの著書を通して、サグラダ・ファミリアの『音』に注目しましたが、ガウディ建築に共通して見られる自然、幾何学、エコロジーに注目しても面白いのではないのでしょうか。

